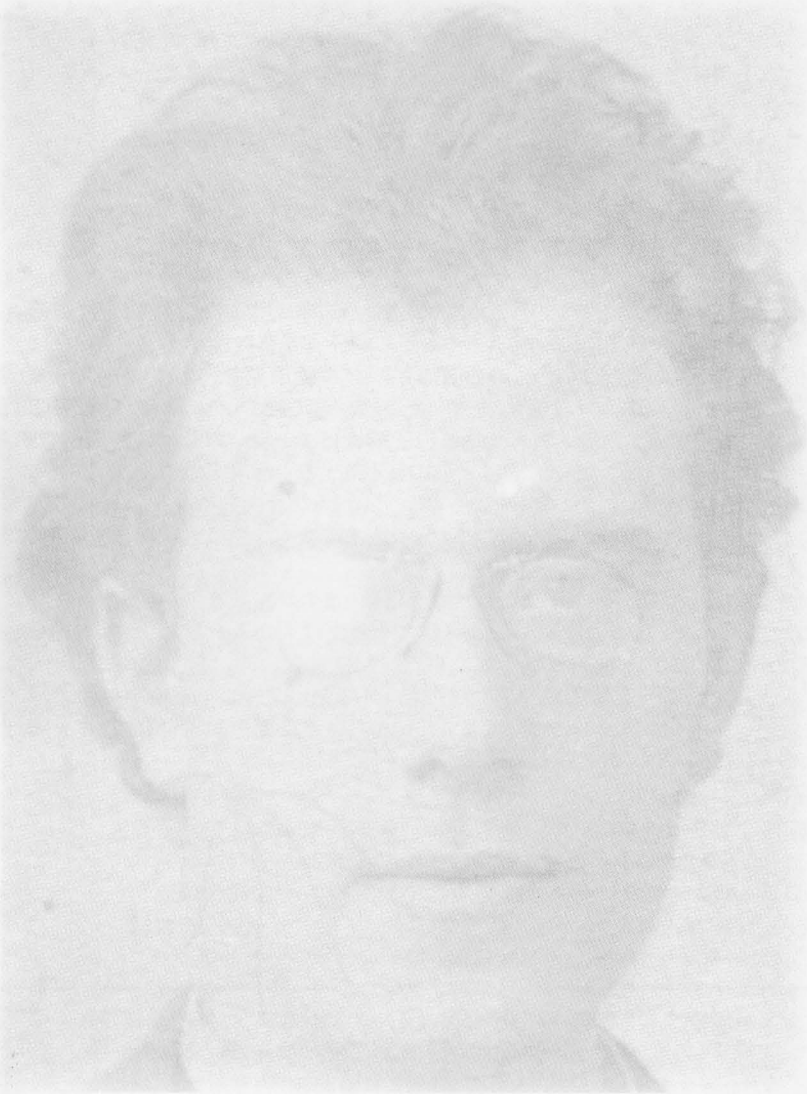


水星交響楽団第２７回定期演奏会

The Mercury Symphony Orchestra 27th Regular Concert

２０００年１２月１６日

16th December 2000

東京芸術劇場

TOKYO METROPOLITAN ART SPACE

Welcome&Program

ご挨拶

本日はお忙しい中、私ども水星交響楽団の演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

20世紀も残すところあとわずかとなりました。水響としても今世紀最後の演奏会となります。1984年に結成され、今まで26回の定演を含め多数の演奏会を行なってきましたが、やはり大トリを務めるのはこの曲「復活」しかありません。

水響では、実は1989年5月の第8回定演でも「復活」を取り上げています。当時の水響は、設立されて5年が経過していたとはいえ、オケとしての陣容も満足に整っていない状況でした。なにしろ普段の練習では弦楽器は1プルトずつしかいないということがザラにあり、今にして思うと本当によくやってたなあという感慨があるのと同時に、指揮者の斉藤先生にはよく我慢していただいたなあと思います（我慢という点では今もあまり変わりませんが…（斉藤先生すみません！））。

そんななかでなぜ「復活」をやることになったのか。当時の日本がバブル絶頂期を迎えつつあったのも遠因でしょうが、やはり大きかったのは、第4回定演でベートーヴェンの「第9」をやったことと、第5回でマーラーの交響曲第4番をやったことでしょう。最近の研究で明らかになったのですが、水響メンバーの遺伝子構成はマーラーのそれに特徴的な形質を必ず含んでいることもあり、この2つの共通項として「復活」がでてくることは当然の流れでした。演奏会自体も過去に例がないほど盛りあがり、本番後の打ち上げはほぼ3日間にわたりましたが、なんといっても、このような大曲をやったという達成感が非常に大きく、オケ自体が大きく変化した、まさに水響にとってターニングポイントだった気がします。新世紀に向け更に飛躍するべき今回の演奏会にはこの曲しか考えられません。

今回の演奏会ではオーケストラ約110名・合唱約130名が舞台に乗りますが、実をいうと前回の「復活」経験者はおそらく10%くらいしかいないのではないかと思います。前回からの11年でそれだけ人の入れ替わりもあったわけですが、遺伝子は相変わらず間違いなく受け継がれております。世紀末の一夜、来るべき21世紀に想いを馳せつつ、ごゆっくりお聴きください。

最後になりましたが、我々以上にマーラー遺伝子が間違いなく濃い齊藤栄一先生、今回独唱をお願いした大沼美恵子先生・西川裕子先生、今回お手伝いいただく合唱団の皆様、そして、いつも様々な面でお世話になっている一橋大学管弦楽団の皆様をはじめご指導賜った多くの皆様に厚く御礼申し上げます。

それでは、今世紀の最後に、この曲です…

水星交響楽団　委員長　植松隆治

プログラム

グスタフ マーラー　交響曲第２番 ハ短調 「復活」
Gustav Mahler Symphonie II (Auferstehung)

第１楽章 アレグロ・マエストーソ
1Satz Allegro Maestoso

第２楽章 アンダンテ・モデラート
2Satz Andante moderato

第３楽章 静かに流れるような動きで
3Satz In ruhig fließender Bewegung

第４楽章 「原光」非常に荘厳に、しかし簡潔に「おお、くれないのちいさな薔薇よ！」
4Satz "Urlicht"(aus "des Knaben Wunderhorn"):Sehr feierlich,aber schlicht

第５楽章 スケルツォのテンポで（荒々しく突進して）～ゆっくりと～アレグロ・エネルジコ～ゆっくりと
5Satz Im Tempo des Scherzo (Wild herausfahrend) ～langsam ～ Allegro energico ～langsam)

齊藤栄一　指揮

京都大学にて音楽学を、国際基督教大学大学院にて美術史学を研究。この間、指揮法を尾高忠明、田中一嘉、円光寺雅彦の各氏に学ぶ。また、1981年には、京都大学交響楽団とともに2週間にわたりドイツ、オーストリアにて演奏旅行を行い、ザルツブルグ音楽祭などにて指揮する。1982年には、関西二期会室内オペラ・シリーズ第9回公演、ブリテン作曲「ねじの回転」（関西初演）の副指揮者を務める。1984年より、水星交響楽団の常任指揮者に就任。1995年には東京文化会館で水星交響楽団、オルフ祝祭合唱団、佐多達枝バレエ団と、完全舞台形式「カルミナ・ブラーナ」を、また、昨年3月にはラヴェルの舞踊交響曲「ダフニスとクロエ」全曲を指揮。現在、明治学院大学教授。

大沼美恵子　ソプラノ

東京芸術大学卒業。同大学院修了。シュトゥットゥガルト音楽大学に学ぶ。第29回全日本学生音楽コンクール東日本大会第1位。第53回日本音楽コンクール入選。東京芸術大学定期演奏会『ドイツ・レクイエム』にてコンサート・デビュー以来、宗教曲や交響曲のソリストを数多く務める。オペラ・デビューを東京芸術大学創立百周年記念オペラ『オルフェオとエウリディーチェ』のエウリディーチェ役にて飾り、二期会では、『ドン・ジョヴァンニ』のドンナ・アンナ役で華々しくデビューしている。その他、数々のオペラを歌い演じている。NHKニューイヤー・オペラ・コンサートやNHK-FMリサイタル等にも出演している。その稀な澄んだ声と女性らしい歌の解釈を好む人も少なくない。中山悌一、三林輝夫、植木桂、U.クッター、K.リヒター、L.ボサバリアンの諸氏に師事。埼玉大学、常葉学園短期大学、二期会オペラスタジオ各講師、二期会会員、日本演奏連盟会員。

西川裕子　メゾソプラノ

東京芸術大学声楽科卒業、同大学院（オペラ専攻）修了。伊藤亘行、村上絢子、中村邦男の各氏に師事。学内にて安宅賞受賞。「芸大メサイア」にアルト・ソロとして出演。読売新人演奏会、東京文化会館推薦音楽会に出演。第54回日本音楽コンクール声楽部門第3位に入賞。第10回ニッカ・カルメンシータ新人賞第1位入賞。オペラでは「フィガロの結婚」のケルビーノ、「コシ・ファン・トゥッテ」のドラベッラ、「セヴィリアの理髪師」のロジーナ、「カルメン」のタイトルロール、「天国と地獄」のヴィーナス等を演じる。'97年11月にはカザルスホールに於いて初めてのリサイタルを開いた。この他様々なコンサート活動や宗教曲のソリストとしても活動している。また、O.F.C.はじめ多くの合唱団のヴォイストレーナーとしても活躍。二期会会員。

オルフ祝祭合唱団（OFC）

1995年、佐多達枝バレエ団・水星交響楽団と共にオルフ「カルミナ・ブラーナ」を上演するにあたり結成された合唱団。オルフの理念「音と言葉と舞踊の融合」を実現し、振りをつけて歌う事が特色となっている。メンバーは、学生、主婦、教師、ジャズシンガー、裁判所職員、デザイナー等々バラエティーに富むが、一緒に音楽を作るという情熱の下に、公演ごと歌や振り付けの練習に励むダンシング合唱団である。水響との共演は、初回の「カルミナ・ブラーナ」、2回目のプーランク「グローリア」、3回目の「ダフニスとクロエ」に続き、今回で4回目となる。ベートーヴェンの交響曲第9番の公演を行うなど、回を重ねるごとに磨きのかかる彼らの歌声は期待する価値大である。

Columns1

世界は舞台、人はみな役者

齊藤栄一

先日、レイフ・ファインズが赤坂ACTシアターで、シェークスピアの『リチャード2世』と『コリオレイナス』の両方を主演した。優柔不断型のリチャード2世と猪突猛進型のコリオレイナスという、まったく異なる性格を持ったふたつのタイトル・ロールを、ファインズは見事に演じ分けていた。

いや、なにも、役柄を演じ分けなければならないのは役者ばかりではない。演奏家だっておなじことだ。しばらく前に、カザルス・ホールと同じビルのなかにあるヴォリーズ・ホールというところで、アメリカの代表的な弦楽四重奏団であるガルネリ・カルテットが、日本の若いカルテットを指導するという公開レッスンがあった。芸大や桐朋の大学院生クラスの人たちによって構成された四つのカルテットを、ガルネリのメンバーが一人ずつ順番に1時間ずつ指導するというもので、とても勉強になったが、なかでも強く印象に残っているのが、ファースト・ヴァイオリンのスタインハートが盛んに力説していたことだった。彼は、学生の奏者たちにむかって、いま自分が演奏している音楽の表情をいつもつかむようにこころがけること、そして、それをカルテットのメンバーだけに向けてではなく、客席の一番後ろにいる人に向かって、常に演じ続けることを、ことあるごとに繰り返して訴えるのだった。

「復活」というからには、その前に「死」がなければならない。私見によれば、第3楽章のスケルツォは「死の舞踏」である。もちろん、私たちの誰一人として、「死」と「復活」を経験したことはない。また、することもできない。しかし、20年、30年、そして40年と生きてきた水響のメンバーが、それぞれの人生において、肉体的には不可能であっても、精神的には「死」に匹敵するほどの苦しみと、そこからの「復活」を経験するということは、程度のちがいはあれ、なんらかの形であったにちがいない。

私たちの今夜の演奏が、ただ美しいサウンドと迫力たっぷりの音量の集積で終わってしまうのではなく、この『復活交響曲』という作品が、もちろん私自身をも含めて、メンバーのひとりひとりの精神史における「復活」体験に重ね合わされるかたちで、客席の一番遠いところまで届くべく演じられたとき、それはおそらく、聞きに来てくださった方々それぞれの人生における「復活」体験にも重ね合わされて、肉体の現実的な「復活」ではなく、人間精神における「復活」のドラマとして、今日のホールに集うすべての人によって共有されることだろう。

山畑先生の思い出

1989年5月3月、私達水星交響楽団は初めてマーラーの交響曲第2番「復活」を武蔵野市民文化会館で演奏しました。創立から5年、ベートーヴェンの第9とマーラーの4番の実績に気を良くしての暴挙、もとい快挙です。一橋大学管弦楽団の若手OB数名が「現役時代にできなかった曲をやろう」と寿司屋で盛り上がって作られた水響。「復活」は所謂“長年の夢”への挑戦であり、経験したことのない大イベントでした。この演奏会は、参加メンバー一人一人に忘れられない思い出を残すことにもなります。この場をお借りして前回の「復活」に纏わる大切な思い出について回想してみたいと思います。

ハープの山畑松枝先生は、長くNHK交響楽団の団員を務められ、定年後は多くの大学オーケストラにエキストラとして参加されていました。先生はハープ界の大御所であったのですが、尊大さや気難しいところが全くない方でした。まだ礼儀も常識も備わっていない学生の支離滅裂な活動にも常に寛容な態度で接して頂き、一橋でも長らく「ハープといえば山畑さん」という揺るぎない信頼感を得ておられました。こうした中、1982年に一橋大学管弦楽団は自前のハーピストを得ることとなり、その後水響に受け継がれた関係で、一時山畑先生と私達との接点は遠のきます。水響結成から5年にして、ようやく2台のハープが必要となり、当然2ndハープとして山畑先生に出演をお願いしようということになったのが1989年の「復活」でした。ところが、久々の再会を心待ちにする団員の想いとは裏腹に、先生はこの時、ハープ奏者として致命的な事情を抱えておられたのでした。直前に乳癌の手術を受けられ、後遺症の為に右手が全く動かせない状態になってしまわれていたのです。「こんな状態でも出演させてもらえるのであれば、是非ともご一緒したいけれど、やっぱり無理よね…」と仰る先生のお言葉を胸に、悩みに悩んだ首席ハーピストは水響の委員長を始めとするマネージメントに判断を委ねることとなりました。指揮者の斎藤さん、委員長、コンマスその他ご意見番が勢揃いした大衆酒蔵“さかえや”では、ほとんど議論の余地も無く、「そういう事情であれば、こちらからお願いしてでも出て頂こう」ということが満場一致で決定されました。首席ハーピスト経由で正式に出演依頼がなされたのが数日後、先生の右手のハンディキャップを補う為のパート練習がその後幾度か繰り返されたと聞きます（首席ハーピストのスコアには今でも先生の出番を“やりくり”した書き込みが残されています）。

さて、本番ですが大きな夢に向う団員の勢いは、当日ピークを迎え、郡司博先生率いる三多摩合唱団（現コール・ライエンコーワ）もステリハまでの不調が嘘の様に本番は絶好調、これに音量調節の利かないオルガン（？）がトドメとばかりに鳴り響き、ある種宗教的な荘厳さを醸し出して大成功のうちに終演を迎えます。山畑先生も、左手一本で大いに奮闘され、演奏会を盛り立てて下さいました。普段はレセプションには参加されませんが、この時ばかりは、会場の隅っこに先生の穏やかな笑顔を拝見することとなります。「なにか皆の前で話すようなことになるといやだわ」と冗談まじりに仰っていた先生は、案の定全員からの“山畑コール”により壇上に進まれ、「この演奏会を私の“復活”にしたいと思います！」と仰り、万来の拍手で迎えられました。

山畑先生が亡くなられたのはそれから約半年後のことです。私達は大きな悲しみにつつまれました。

それから10年。本日水響にとって2回目の「復活」を演奏することになりました。20世紀の最後の10年間を、私達は数限りない可能性の中から自らの意志で水響と共に過ごすことを選択しました。職場での時間以外のほとんどの時間と労力を水響に注ぎ込んで、今日に辿りついた訳です。1989年の「復活」がその後10年の私達の選択を支配した様に、水響にとって本日の「復活」はこれからの私達の針路を示唆する特別な意味を持つ演奏会です。かつて、山畑先生と共有し、その後も新しいメンバーにより脈々と育まれてきた“水響の心意気”が、演奏を通してご来場の皆様に届くことを願い、私達の全ての力を投じて心を込めた演奏をしたいと思います。

最後に一つ、ご紹介したいことがあります。本日2ndハープには山畑先生の長女であられる渡辺かやさんをお迎えしています。縁あってこうした場でご一緒できることで、遥か彼方より見守って頂いているであろう山畑先生を、少しだけ近しい存在に感じることができるようにも思えます。

（東森）

Notes

マーラー／交響曲 第2番 ハ短調 「復活」

滅多にメイン曲の再演を行わない水星交響楽団が、丸10年ぶりにまさしく満を持して再演に踏み切ったのがこの作品であるという事自体、非常に象徴的である。事実この作品が20世紀最後の演奏会を飾るにふさわしい大作であることは言うまでも無いが、水星交響楽団そのものにも、前回の熱演から10年という時を経て更に成熟した演奏を聞かせてくれる事が期待される。勿論前回のステージに参加していた古参のメンバーも残っていると聞くが、一方で大多数の新たに加わったメンバーと一丸となって築き上げてきたその後の歴史こそが本日の演奏の出来を左右する原動力となる事は疑い無い。それはまさしく水星交響楽団の成長を物語る名演となって結実する事になろう。

一方で世紀末ということからマーラーの諸作品が取り上げられる機会も多いが、以前よりこの作曲家の演奏にいわば執念とも言うべき情熱を注いできた水星交響楽団だからこそ、この世紀末の当に最終局面に「復活」を演奏するという特権を許されていると言っては大げさであろうか。聞くところによると彼等は10年前の演奏会の終演後には10年後の世紀末に再演する事を決意していたとの事。それだけでも並大抵の執念ではない。

そんな演奏会の曲目解説を依頼され、こちらも相当の気合を入れて臨まねばならんと発奮し、まずはこれまで集めた40数種類のCDを片っ端から聴いてやろうと思い立ったまでは良かったが、これがそれこそ生半可な根性では太刀打ちできぬ難行となってしまった(決して苦行ではないのだが…)。第一スコア片手に熟聴しようなどと立ち向かおうものなら1日に何度も聴けるような体力既に無く、もとより演奏によっては90分を超える場合もある大曲、瞬く内に返り討ちに会い、いやはや復活どころか死にっぱなしになりかけてしまう仕儀と相成ってしまった。教訓:「復活をこなすには、まず体力、気力の圧倒的な充実が必須である」。

閑話休題、「復活」というからには文字通りでは、「一度死んだはずの人が生き返る事」である。長大な曲の最後を締めくくる5楽章の後半部分、昔のレコードであれば2枚目の裏辺りからの盛り上がりとそれに続く壮麗なフィナーレがまさしく「復活」の表現であるならばそれに先立つはずの「死」はどこにあるのだろうか。

1888年に作曲が開始されたこの作品は数度の中断を挟みつつ、マーラーとしては異例に長期にわたって作曲が進められている。その間彼はライプチヒからブダペストを経てハンブルグに至る街々で指揮活動を続ける一方、休暇中の静養先であるアッター湖畔の湯治場シュタインバッハで作曲活動を進め、この作品も最終的には1893年から翌年にかけてその大半がその地で書き上げられた。

その出発点となったのは俗に日本では「葬礼」というタイトルで呼ばれている葬送行進曲風の交響的断章であるが、原題は"Todtenfeier"であるから独語に詳しい方であれば自ずと日本名のニュアンスとの差異に気付かれる事であろう。どうやら彼はこのタイトルを「死者の祭り」というポーランドの詩人アダム・ミッケーヴィッチの作品名より引用したようであるが、実際の詩そのものの内容は異教徒的な死者への儀礼を取り扱った半ばオカルティック、あるいはエキゾティックなものとの事で、彼自身大層詩自体は気に入っていたそうだが、そう聞いてみると果たしてそうした内容まで深く踏み込んで表題化したとも考えにくい。となるとマーラーの諸作品に常に流れる彼の「死」へのこだわりのようなものがこの表題の根底にある事は想像に難くないが、一方で前作交響曲第1番の本来の主人公であったはずの「巨人」の死に何らかの関係があるのではないかと思うのは考え過ぎであろうか。最近では単独で取り上げられる機会も増えつつあるこの交響的断章は現状の1楽章のベースとなっているものであるが(事実交響曲全体の1楽章に差替えて演奏されるケースもある)、細部において相違点が多く、また小節数も多い為、現状の1楽章に慣れ親しんだ耳にはやはり若干の違和感(若さゆえの回りくどさとでも言えようか)が残る事は否めない。マーラーの自作品に対する改訂癖は徹底していたから、勿論後になってこの巨大な交響曲の冒頭楽章に流用するまでの過程で十分吟味され尽くした上で今の形になったのであろうが、1888年の作曲開始時点での彼の作品に対する思考を窺い知る上でも、この「葬礼」の意義は大きいものと考える(いずれ水星交響楽団で取り上げられる日も来るに違いない)。

さて3年後の1891年、マーラーはこの「葬礼」を携えて大指揮者ハンス・フォン・ビューローに会う。彼は既に自分の第2交響曲に流用しようと考えていたこの作品をピアノで尊敬する大先輩に聴かせた。しかしその演奏を聴いた巨匠はパニックに陥り、「これに比べればトリスタンだってハイドンの交響曲並だ」と叫んだという。20世紀も終演を迎える今となってはまさしく誉め言葉とも受け止められるこのコメントは、勿論当時にあっては

辛辣な批評に他ならず、当時30過ぎたばかりのマーラーをひどく落ち込ませる事になった。

しかし彼の不屈とも言うべき作曲意欲は、暫しの中断を経て、続く楽章の作曲へと向かわせることとなる。1893年の夏季休暇には件のシュタインバッハで2楽章をたった7日間で書き上げ、更には当時取りかかっていた「子供の不思議な角笛」の中の「魚に説教するパドヴァの聖アントニウス」を流用した3楽章、同じく「角笛」の歌詞を使った独唱が中心の4楽章「原光」と精力的に曲を完成に導こうと努力する。さしずめこの中間楽章部、特に2楽章、3楽章は死者の生への回想ともいうべきか。シュタインバッハの自然を表すような美と厳しさが綯い交ぜになった2楽章と滑稽なまでの「角笛」の歌詞を想起させ、人間の喜劇性を諧謔味溢れて表現する3楽章。そしていよいよクライマックスの大団円に向けて静かな序奏を成す4楽章。舞台は整った。

しかしこの時点でフィナーレのテーマが果たして「復活」にあったかどうかは、はっきりしていない。既に相当の規模となりつつある第2交響曲の終楽章に至って、それにふさわしい構想が見出されず、苦悩したという事実が伝えられているからである。

突破口を与えたのは1894年3月29日に執り行なわれた、大指揮者ビューローの葬儀の席で耳にしたフリードリヒ・クロプシュトックの詩による賛歌であった。ビューローといえば、奇しくも自信作でありこの交響曲の第1楽章の下地となった「葬礼」を酷評した当人である。「甦るのだ、しばしの眠りののち、再び甦るのだ」という賛歌が彼の霊感を刺激し、ここに「死」から「生」に至る「復活」を見事に表現した大交響曲が陽の目を見るに至ったのだった。

曲はソプラノ、アルトの独唱、4部の混声合唱を伴うオルガン付きの大オーケストラによって奏でられる。ここでは敢えて細かい楽章毎の解説は省かせて頂くが、是非ご自分の耳でこの大曲に込められた彼の思考を汲み取って戴きたい(但し、真剣に向かい合うには充分な体力と気力が必要です。念の為)。

因みにマーラー自身は1896年12月13日の初演以来、晩年に至るまでこの作品を13回演奏している（彼の交響曲中、3番目に多い回数である。さて1番目と2番目は？)。

所謂マーラーブームは一段落し、彼の音楽自体が既にスタンダードとなりつつある世紀末の今だからこそ、マーラーの思考というものを体験する意味において、その偉大な精神の片鱗が垣間見える事を期待しつつ…

敬愛するレニーの没後10年の世紀末に…

Ivanco Mekosky

（マーキュリー・バッハ・アカデミー酒席Vn奏者）

♪♪♪♪♪♪♪♪ 一橋大学管弦楽団 演奏会のお知らせ ♪♪♪♪♪♪♪♪♪

一橋大学管弦楽団スプリングコンサート2001
2001年4月7日（土）6：30開場 7：00開演
指揮：田中 一嘉
会場：武蔵野市民文化会館

チャイコフスキー 交響曲第4番
ボッテシーニ『Gran Duo Concertante』
Solo:Vn 久保田 巧
Cb 河原 泰則
（ケルン放送交響楽団首席コントラバス奏者）
伊福部 昭『交響譚詩』
お問合わせ：深沢（090-2405-2076）

一橋大学管弦楽団2001ドイツ演奏旅行
2001年3月21日（水）～29日（木）
23日（金）20：00（予定）ケルン大学講堂
25日（土）11：00（予定）ベルリン コーミッシェオーパー
指揮：田中 一嘉

チャイコフスキー 交響曲第4番
ボッテシーニ『Gran Duo Concertante』
Solo:Vn Raphael Oleg
（1986年チャイコフスキー国際コンクール優勝）
Cb 河原 泰則
（ケルン放送交響楽団首席コントラバス奏者）
伊福部 昭『交響譚詩』
お問合わせ：越智（090-9852-8127）

Text&Translation

《歌詞対訳(訳：横地篤志)》

4 Satz

《Urlicht》 (aus "Des Knaben Wunderhorn" von Achim vom Arnim und Clemens Brentano)

O Röschen roth!

Der Mensch liegt in größter Noth!
Der Mensch liegt in größter Pein!
Je lieber möcht' ich im Himmel sein!

Da kam ich auf eine breiten Weg.
Da kam ein Engelein und wollt' mich
abweisen.
Ach nein! Ich ließ mich nicht
abweisen!

Ich bin von Gott und will wieder
zu Gott!
Der liebe Gott wird mir ein
Lichtchen geben,
Wird leuchten mir bis in das ewig
selig Leben!

第四楽章

「原光」　(「子供の魔法の角笛」(アルニムとブレンターノの民謡詩集)による)

《メゾソプラノ独唱》
おお くれないのちいさな薔薇よ！

人間は深い苦しみの中にある！
人間は深い悩みの中にある ！
むしろわたしは天国にいたいと思う！

わたしは広い道をたどっていた。
すると天使がひとりやってきて
わたしをおいはらおうとした。
おお そんな！ むざむざわたしは
あとにひきさがるなどしなかった。

わたしは 神から生まれたのだから
ふたたび 神のみもとにもどるのだ！
愛する神はきっとちいさな燈火を
あたえてくださることだろう。
その光は、わたしが永遠の幸福ないのちを得るまで
わたしを照らしてくれることだろう！

5 Satz

《"Auherstehung" von Friedlich Gottlieb Klopstock und Gustav Mahler》

Aufersteh'n, ja aufersteh'n wirst du,
Mein Staub, nach kurzer Ruh!
Unsterblich Leben ! Unsterblich Leben
Wird Der dich rief, dir geben!
Wieder aufzublüh'n wirst
du gesät!
Der Herr der Ernte geht
Und sammelt Garben
Uns ein die starben!

O glaube, mein Herz, o glaube:
Es geht dir nichts verloren!
Dein ist, dein, ja dein, was du
Gesehnt,
Dein, was du geliebt, was du
gestritten !

O glaube: du wardst nicht umsonst geboren!
Hast nicht umsonst gelebt, gelitten!

Was entstanden ist, das muß vergehen!
Was vergangen, auferstehen !
Hör' auf zu beben!
Bereite dich zu leben!

O Schmerz! Du Alldurchdringer!
Dir bin ich entrungen!
O Tod! Du Allbezwinger!
Nun bist du bezwungen!
Mit Flügeln die ich mir errungen,
In heißem Liebesstreben
Werd' ich entschweben
Zum Licht, zu dem kein Aug'
gedrungen!

Sterben werd'ich, um zu leben!
Aufersteh'n, ja aufersteh'n,wirst du,
Mein Herz, in einem Nu!
Was du geschlagen,
Zu Gott wird es dich tragen!

第五楽章

(クロプシュトックの詩「復活」及びマーラー自身の詩による)

《合唱》
よみがえる、そう、よみがえるのだ、
塵なるわが存在よ、
ひとときの憩いののちに！
死すことを知らぬ生命を
おまえを呼んだ者が
さずけてくれる。
ふたたび花咲くために
おまえは種蒔かれたのだ！
収穫の主が歩んできて、
穀物の束なるわれらを、
死んだわれらを拾いあつめてくれる！

《メゾソプラノ独唱》
おお、信ぜよ、わが心よ！
おまえはなにも失ってはいないのだ！
おまえのものだ、そう、おまえのものだ、
おまえが憧れたもの、
おまえが愛したもの、
おまえが求めたものはすべて！

《ソプラノ独唱》
おお、信ぜよ、
おまえは決してむなしく生まれたのではない！
決してむなしく生き、むなしく苦しんだのではない！

《合唱》
生まれたものは滅びなければならぬ、
滅びたものはよみがえらなければならぬ！
恐れおののくのはやめよ！
生きるための準備をせよ！

《ソプラノ、メゾソプラノ二重唱、及び合唱》
おお、苦しみよ！ すべてをつらぬくものよ！
わたしはおまえから逃がれ出た！
おお、死よ！ すべてを征服するものよ！
いまこそおまえのほうが征服されたのだ！
わたしはかちえた翼をひろげ
燃えあがる愛の力につつまれて
舞いあがり消えていこう！
いかなる目も届かぬ光のもとへ！

《合唱》
生きるために、わたしは死ぬ！
よみがえる、そう、よみがえるのだ、
わが心よ、一瞬ののちに！
おまえが戦い勝ち取ったものが
おまえを神のみもとに運んでいってくれる！

水響な人々７：ちゃんと聞いてね！でも誤解しないでね！舞台袖の金管奏者たち。

これまで水響の定演に来られた方でしたら、一昨年の「アルプス交響曲」、昨年の「ダフニスとクロエ」などで、舞台上に奏者がいないのに遠くからホルンやラッパの音が響いてきたのを覚えておいででしょう。そう、それこそバンダ（別働隊）の音です。舞台袖で金管奏者たちがテレビモニターに映る指揮を見ながら懸命に吹いているのです。

今回の「復活」では5楽章がバンダの出番です。顔ぶれはトランペットが桜井新さん、田玉詩織さん、七五三直人さん、宮崎幸恵さん、ホルンが阪上行人さん、伊集院正宗さん、筧尚子さん、鈴木周太郎さんと、計８人がスポットライトも浴びずに頑張っています。「目立ちますから緊張しますよ。音をハズしたら竹刀で叩くぞ、なんてプレッシャーをかける先輩もいますしね」と話すのは、剣道初段の宮崎さん(20)。

彼らの出番を紹介しましょう。まず、開始約2分後、オケ全体が地鳴りのような大音量を吹ききると、ホルンが静かにエコーを奏でます、これが第1弾。そして５分後に弦楽器、続いて木管楽器が3連符で静かに動く時、舞台上のホルンのファンファーレに続き、エコーが聞こえます。これが第2弾です。「ここはホルンしかないところなのでムチャクチャ緊張しますよ。しかも、なかなか出にくいハイF（高いファの音）がありますからねえ。奏者が4人いるので誰かが、きっと吹いてくれると信頼してますけど」と伊集院さん(30)は話します。

続いては、しばらくして開始約15分後、弦楽器が音を刻みながら素早く進行する時、トランペットが「パッパ　パパパ　パッパパー」とまとわりつくように聞こえます。そして、開始約19分後が聞かせどころです。フルートとピッコロのソロに絡むファンファーレを吹いて、美しい合唱を導きだすわけです。

それが終わると、彼らはステージに登場し、最後の怒涛のような盛り上がりに参加します。そんな時、ありがちな誤解は「演奏会に遅刻するなんて、けしからん」などと思われることです。真相は、上記の通りですのでお気をつけ下さい。

ところで、彼らは、５楽章の出番まではずっと待機していますが、唯一の例外は田玉さんです。彼女はステージ・パートも兼任していますので、途中で舞台を降りてバンダに合流する形になります。「途中で出入りするのって恥ずかしいんですよ。静かに歩かないとなあ」と話す田玉さん(25)は、美しく歩く練習にも余念のない様子です。そこで皆様に再びご注意を申し上げます。彼女が途中で席を立っても、決して気分が悪くなって退場するわけではございませんので、お間違いのありませんように。

（HIDE）

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪ 次回演奏会のお知らせ ♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

水星交響楽団第28回定期演奏会

2001年6月10日（日）文京シビックホール　大ホール 午後2時開演（予定）

指揮：斉藤栄一

ブリテン　歌劇『ピーターグライムズ』より『4つの海の間奏曲』

ドビュッシー　三つの交響的素描『海』

ベートーヴェン　交響曲第3番変ホ長調『英雄』Op. 55

お問合わせ：植松（03-3594-5654）

Members

水星交響楽団

常任指揮者：齊藤 栄一
コンサートミストレス：中里 咲子
金管トレーナー：山田 裕治
副指揮者：榎原 尚徳
舞台裏指揮：櫻井 統

●1st Violin
今井規子
小川敦生
折原範明
黒川夏実
後藤正尚
坂本聰
鈴木尚志
髙橋広
竹添愛希子
中里咲子
西端雄一
福島秀哉
前嶋靖子
松本祥世
守山算哉
米嶋龍昌

●2nd Violin
大岩淳子
川俣三枝子
鈴木牧
鈴木真由子
祐成秀樹
土屋和隆
徳地伸保
中里剛
野村国康
福地由樹子
福原優子
前田啓
吉田健一郎

●Viola
新井朋子
有井晶
尾崎正峰
川俣英男
木曽隆
田北佐和子
田口浩子
永井好
西高司
浜島多加志
林朱美
傅冠昇
松岡正人
三上さやか
宮崎雅子

●Violoncello
市村啓子
江夏幾多郎
大原潤
落合直美
鈴木皇太郎
髙橋麻衣香
高原学
東郷丞
中山佐知子
日吉実緒
松本華奈
三輪恭子
能岡雅人

●Contrabass
大西功
落合毅
金子千春
刈田淳司
高草和也
長屋裕大
西永章彦
深澤雄己
本多美佐子
松本敦

●Flute
川崎裕恵
田口良子
本田洋二
松本美穂子

●Oboe
井本もい
上田覚
小出裕之
野口秀樹

●Clarinet
大山泰広
岸川典子
栗原千波
西村伸吾
横地篤志

●Fagotto
清家慎一
冨井一夫
安田圭介
渡辺さつき

●Horn
伊集院正宗
榎原尚徳
筧尚子
北典子
桑名久美
小松泰三
阪上行人
佐藤真一
鈴木周太郎
東森智史
山形尚世

●Trumpet
淺田健二
家田恭介
岩瀬世彦
金子恭江
桜井新
七五三直人
田玉詩織
牧明宏
宮崎幸恵

●Trombone
佐藤幸宏
瀬古義久
中野裕司
本間圭祐

●Tuba
植松隆治

●Percussion
石井浩史
石川誠
井上千尋
梶浦未紀
岸敦子
品田喜久
髙橋淳
野口直子
矢内夏希
山本勲
吉村恵一
渡辺麻子

●Harp
東森真紀子
渡辺かや

●Organ
山本由香子

オルフ祝祭合唱団

賛助出演：稲門グリークラブ・東京リーダーターフェル1925
合唱指揮：依田 浩
副指揮：小林 恵子
発声指導：西川 裕子・清水 裕子
ピアニスト：河内 菜穂
団長：柴 大元
副団長：高橋 敦子
☆：パートリーダー

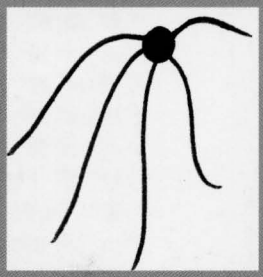
●ソプラノ
秋田 由紀子
阿部 恵子
池内 史記子
石川 智子
泉谷 美鈴
今井 緑
牛嶋 真紀子
大川内 初実
大窪 信子
川窪 美穂
川島 まり子
岸山 絵美
木曽 香
黒沢 真紗子
小池 皆恵子
小泉 真樹
郷田 麻由
後藤 エリカ
小山 久美子
斉藤 幸江
佐藤 幸
塩沢 明子
柴 真理
末吉 久美
須山 昌子
瀬川 知恵子
高橋 敦子
田中 千恵子
直井 真弓
中里 真紀
中嶋 安希子
中島 正江
難波 史子☆
野崎 みさき☆
藤田 貴子
松本 和子
丸本 陽子
森島 珠紀
矢内 由美子
山口 静香
李 美陽

●アルト
石井 晶子
伊藤 美和
伊藤 礼子
岩原 奈美
江田 恵利子
大西 裕美
岡 アキ
奥山 明子
河本 光代
菊地 薫
久保 曜子
国見 厚子
倉田 房子
小島 佐季子
小島 典子
佐枝 陽子
佐藤 朋子
佐藤 美咲子
柴田 亜美
島田 志保
重野 眞奈美
祖父江 美和☆
高橋 清枝
瀧口 喜恵
鶴間 美穂
鶴間 瑞穂
中西 優子
西山 倫代
籏 訓枝
平竹 道子☆
平田 由香
福田 寿子
藤田 明子
藤田 喜美子
藤森 敦子
古屋 佳子
益田 裕子
松永 路子
丸山 美香
村山 恵
森 由記子
山口 せつ子
山本 典子
山本 真理
山村 邦江
吉田 有美子
若山 洋子
渡辺 あつ子

●テノール
朝日 国男
尾崎 主頼
城戸 了
小玉 隆司
酒井 眞理
柴 大元
鈴木 新也
寺島 利尚
遠西 幸男
二宮 一男(リ)
濱埜 克巳
藤田 光郎
増田 稔
山崎 寿
湯本 明郎(リ)

●ベース
浅妻 勲(稲)
新井 国雄(リ)
伊藤 博史
入澤 三徳(リ)
宇敷 裕
梅原 健悟
大石 康司
風間 登紀夫
楠見 昭三(リ)
黒沢 幸男(稲)
佐藤 一治
佐藤 勝
佐藤 公俊(稲)
沢登 典夫(稲)
渋沢 知宏☆
清水 卓爾(稲)
瀬川 隆生
関川 秀雄(リ)
高木 誠
高島 端夫(稲)
竹田 政輝
玉崎 洋一(稲)
鳥山 純一(リ)
野口 幾治
野嶋 晋
樋口 作衛
福田 真人
涌田 裕司

(リ)：東京リーダーターフェル1925
(稲)：稲門グリークラブ



水星交響楽団第２７回定期演奏会プログラム
制作：復活プログラム制作特別委員会
（りょんりょん＆KOIDE）
監修：HIDE すけなり
印刷：三六工芸印刷